

# 保育者の用いた笑いと幼児の反応

大田 紀子

## The laughter which is used by preschool teacher and the reaction of young children

Noriko OTA

### 1. 目的

保育現場には子どもたちと保育者の笑顔や笑い声があふれている。それは穏やかな微笑から声を上げて大笑いするといったものまで多岐にわたる。しかしながら、保育者が日々子どもたちと関わっていると、時には緊張が走るという場面もあるだろう。衣服の着脱や排泄の自立など基本的な生活習慣の確立を目指す過程での葛藤、食事中に遊びがエスカレートしてしまった場面、保護者の期待を裏切るまいと奮闘しながら発表会の練習をしている場面など様々であろう。本来子どもたちとはおもしろおかしく楽しい時間を共有したいと願う保育者が、思い通りにいかないそのような場面ですら感情的になってしまうという心情も理解できる。しかし、そのような緊張が走る場面で誰かの笑いが起きたとしたら結果はどうであろうか。やり取りを見ていた他の保育者や子どもが笑ってくれたら、当事者たちの気持ちも軽くなり、直前までイライラしていたことを忘れて一緒に笑い出すというようなこともあるかもしれない。保育者だけに限らず、橘田（2010）は、子どもが何か失敗をした場面において保育者がユーモアを用いることで、子どもの心を救うことができることも述べている。ある瞬間に誰かの笑いがそこで起きるかどうかが決定的な違いを招きかねない（加用，2008）というように、緊張の走る場面を笑いに変えることで緊張感を解消することができるのであれば、保育の場においても笑いやユーモアは重要な要素のひとつであるといえるだろう。

保育現場において笑いを用いることの有用性については、大田ら（2011）が設定保育場面の観察事例を通して検証している。その結果、保育者の用いた笑いは、幼児の活動内容の意識化と活動そのものへの集中を促すために利用されていることが示唆された。また、乳幼児期の笑いやユーモアをどのように育むかについての議論もなされている。友定（1993）は、保育者の笑顔が子どもを受け入れ、肯定しているしるしとして重要であると述べている。また、原坂（1997）は、子どもの心が安定するような人間関係を作ることの大切さを強調し、それには保育者の働きかけだけで幼児を笑わせるだけでは不十分として、子どもの自然な笑いの条件に保育者との安定した愛着関係の重要性を説いている。加用（2008）は、保育者がちょっとした冗談を用いて楽しく関わることによって、日常の保育の中で子どもが笑うことが大切だとしている。

一方で、笑いの持つ意味も科学的に解明されつつある。中島（2008）は、医学的な知見に基づく笑いの効果として、①運動効果、②免疫効果、③活性化と癒しの効果、④コミュニケーション効果をあげている。笑いには、心身の健康の安定と向上はもちろん、人間関係の潤滑油としての

働きがあることがうかがえる。

これらのことから、笑いが保育において積極的に利用されていることはもちろん、心身ともに何らかのポジティブな効果を示すことは明らかとあってよいだろう。よって本研究では、保育者の用いた笑いに対する幼児の反応を分析し、笑いのポジティブな側面に着目するとともに、幼児の年齢による反応の違いから保育において使用される笑いについて検討することを目的とする。具体的には、保育園で行われている体操教室の様子を観察し、保育者が用いた笑いに対する幼児の反応をエピソードとして取り上げ、各年齢で見られる特徴的な笑いについて考察する。

## 2. 方法

**対象** 2つの保育園で外部講師として体操教室を行う指導経験年数29年のベテラン男性保育者1名、およびその体操教室に参加する幼児146名（A保育園：年少児23名、年中児22名、年長児21名；B保育園：年少児32名、年中児30名、年長児28名）を対象とした。

**手続き** 隔週で行われるそれぞれの保育園での体操教室において保育者と幼児全体が映るようにビデオカメラを設置し、記録した。観察期間は2009年7月から12月までの半年間（A保育園：9回；B保育園：11回）であり、1回の観察時間は各保育園とも年少児30分間、年中児40分間、年長児50分間であった。

## 3. 結果と考察

A保育園、B保育園ではほぼ同じ種目の体操教室が行われた。それぞれの種目において保育者が用いた笑いに対して各年齢の子どもたちがどのような反応をしているのかを記録した。本研究では、各年齢において見られる幼児の特徴的な笑いが顕著であると思われる長縄の導入場面をエピソードとして取り上げた。

### ① 年少児

#### 【事例1：A保育園（11月6日）】

保育者は長縄を屋外園庭にへびのようなカーブを描いて置き、「今度は見て見て。真っ直ぐじゃなくて、くにかくにかくにかくにゃ、へびさんみたいになってるよ。ねえ、いいか…今度はよく見て、ゆーっくりでいいから…」と言いながら縄の上を渡り始める。一つ目のカーブのところで保育者は、「おしゃべりしたり、よそ見してたらね…落ちてしまうかもしれない」と言いながら縄の上からそれで歩く。続いて足元を見ながら「あれ？」と言うと、「うふふふふ…」と数人の子どもが笑う。保育者は縄の上に戻って歩きながら、「落ちてしまうかもしれないね…おしゃべりしたり、よそ見したりしないで…よーく…」と再度縄の上からそれると、子どもたちは「うはははは…」と笑う。保育者が縄の上に戻って「ああやって先生みたいによそ見してたりすると落ちてしまうから…」と縄から落ちた瞬間、かなりの子どもたちが大声で笑い出す。保育者が縄の上に戻って「最後まで頑張ってください」と言うと、子どもたちは「はい」と答える。

事例1において保育者は、最初のカーブのところで縄を外れるという逸脱行為を行った。しかしながら、直後に子どもたちの笑いは起きていない。縄の上から外れたということ、足元を見るという行為と「あれ？」という言葉で示して初めて、数人の子どもから笑いが起きている。友定（1989）は3歳児の笑いの特徴として、知的能力の発達に伴い「おかしさ」や「おもしろさ」に基づく笑いが多くなると述べている。「おかしさ」や「おもしろさ」に気づくためには、同時に逸脱しているというズレに気づく必要がある。月齢の差や個人差はあるものの、この場面では年少児が即座にそれらに意識を集中させることは難しかったと考えられる。そこで保育者が逸脱しているというズレを強調し、それを認識させる言動をとることで数人の笑いを誘うことに成功している。以後、保育者によって訪れるカーブごとにパターン化した笑いが用いられ、子どもたちはよく笑うようになる。つまり、「おかしさ」や「おもしろさ」に気づいて笑っているのである。笑いは周囲に伝染すると言われるが、周囲の子どもたちが笑うことによって笑いは広がっていき、同時に逸脱行為というズレに意識を向けやすくする効果があったともいえよう。集団保育、特に設定保育場面においては、このような笑いを通して知的能力も発達していくとも考えられる。

## ② 年中児

### 【事例2：B 保育園（10月23日）】

保育者は長縄を保育室の床の上にへびのようなカーブを描いて置き、「今度はいくねくねになってから、よく見ないと落ちるよ」と言いながら縄の上を渡り始める。子どもたちは保育者の動きに注目する。「よそ見してたり、おしゃべりしてたら落ちるよ…」と1つ目のカーブのところでそのまま縄を外れて床の上を歩く。保育者の動きに注目していた幼児の1人がそれに気づいて「あっ！」と叫ぶ。保育者は「あらっ」と手で口をおさえ、しまったというようなふりをする。子どもたちは声をあげて笑う。「おしゃべりしないで、よそ見しないでやらないと…」と縄の上を歩く保育者に子どもたちは再度注目する。保育者は次のカーブのところで再度縄からそれる。子どもたちはさきほどよりも大声で笑う。「落ちるかもしれんよ」と縄の上に戻って歩き始めた保育者に子どもたちはすぐに注目する。保育者は「よく見て最後まで落ちないように、落ちないように…（縄の上を歩きながら）行ってください」と縄を渡りきる。子どもたちは「はい」と答える。

事例2では、保育者が縄のカーブを外れた時点で即座に1人の子どもがその逸脱行為に気づいて反応している。そしてその反応は、保育者の笑いを誘うような行為を引き出している。結果、他の子どもたちが逸脱行為へ意識を向ける役割を果たし、笑いが起きている。年少児よりも、ズレの認識という笑いの要素への理解がより発達していることがうかがえる。これ以後、子どもたちは次の逸脱行為を期待するかのように保育者の言動に注目する様子が見られる。そして、思い通りのことが起こるたびに子どもたちの笑いは盛り上がっていく。友定（1990）は4歳児の笑いの特徴として、「おかしさ」がわかるようになったことから、それを他者との関係で積極的に利用すると述べている。本事例の子どもたちは、きっと保育者は縄の上を外れて笑わせてくれるだろうという期待を込めて保育者の言動に注目しているようにも思われる。結果、予想通りのズレ

が生じ、その「おかしさ」に笑うということが繰り返されている。そもそも保育者が用いた笑いではあるものの、子どもたちは保育者への期待も含めて、面白がって楽しむということに笑いを利用して考えられる。

### ③ 年長児

#### 【事例3：B 保育園（10月23日）】

保育者が長縄を保育室の床の上にヘビのようなカーブを描いて置き「まずは、綱渡りって知っちゃる？」と尋ねる。「うん」と子どもたち数人が答える。保育者が「落ちたらやり直してしょ…上手にできたら（2階から保育室窓の外を指さしながら）渡ってもらいます…わははは…（笑う）」と「えっ!？」と1人の子どもが答える。保育者は笑顔で「それは怖いからやめましょう」と返す。「さあ、青い線から綱渡りだから落ちないようにね」と綱の上を渡り始める。途中、片足のみ綱の上から外して見せて「片足だけ落ちていいんかね？」と尋ねる。子どもたちは「ダメー」と答える。「そうよね…両方落ちちゃダメよね…ずーっとね、ここ曲がっちゃるからよーく見ないとね。おしゃべりしたりよそ見しよったら落ちるかもしれんから…」と縄のカーブから外れる。「うはーっ」「うわーっ」「きゃーっ」などと、子どもたちからどっと笑いが起きる。「落ちるでしょ」と保育者が言うと、「自分から落ちちよるじゃん」と1人の子どもが言う。縄の上に戻って渡りながら「だ、だからよそ見せんでって言ったじゃろ」と言いながら再び次のカーブのところで縄からそれる。「うははは」「ぎゃははは」と子どもたちは皆大笑いをする。中には保育者を指さしながら笑ったり、手を叩きながら笑ったりする子どももいる。保育者は少しおどけながら慌てた様子で縄の上に戻って「だからよそ見してたら落ちるんじゃから…わかった？」と言いながら縄を渡り終える。子どもたちはうなずく。

事例3において保育者は、年少児クラスの時から何度も経験している年長児に対して序盤にあり得ないような冗談を言ってみせている。それに対して「えっ!？」と言った子どもの表情をうかがい知ることができずその真意は不明であるが、たった1人ではあるものの保育者の冗談に反応している。ここでの保育者はこれ以上付き合うことはせず、笑顔で次の段階へ進めている。その後、保育者によるお決まりの逸脱行為が最初に出現した時点でどっと笑いが起きている。そして、「落ちるでしょ」と確認するかのように言う保育者に対して、「自分で落ちちよるじゃん」と突っ込む子どもが出現している。さらに保育者の逸脱行為が続く中、笑いはどんどん大きくなっていく。このように、保育者の笑わせようとする言動に対して子どもが突っ込みを入れるという反応は、年少児、年中児では見られなかったものである。友定（1991）は、5歳児の笑いの特徴として、笑いを他者と共有することに積極的になり、人間関係がある程度恒常的になったことから、その上に笑いが出現するという、社会化された笑いをあげている。年長児クラスともなると、外部講師との関わりの経験が蓄積され、安定した人間関係が構築された上での笑いともいえるだろう。最終的には保育者を指さしながら笑ったり、手を叩きながら笑ったりする姿は、認識のズレを存分に味わい楽しんでいるとも解釈できるであろう。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究は、保育園で行われている体操教室において保育者が用いた笑いに対する幼児の反応を通して、笑いのポジティブな側面に着目するとともに、保育において使用される笑いについて検討した。その結果、笑いを通して幼児の知的能力も発達していくこと、他者との関係の中で笑いが利用されていること、さらに安定した保育者との関係の中で年齢が上がるにつれて幼児は楽しさやおかしさを味わうことに笑いを利用するようになることが示唆された。

本研究で取り上げた事例に限らず、保育者の行う対象教室において子どもたちの笑顔や笑い声は絶えなかった。保育者が子どもたちを繰り返し笑わせることによって、楽しさやおかしさを共有することはもちろん、保育者の指導内容への子どもたちの注目度も高まっていた。しかし、本研究の対象となった保育者は経験豊富であり、笑いを引き出すタイミングやテンポなど熟達したスキルの持ち主だといえる。松阪（2016）が指摘するように、同様のスキルを全ての保育者が身につけるべきなのかどうかは疑問が残る。また、そのような笑いのセンスを全ての保育者が持ち合わせているのかもわからない。そこに笑いが起きるには、保育者と子どもたちとの間の安定した人間関係が大前提であり、保育者はそのような子どもの心が安定する人間関係の構築を最優先すべきであろう。

また、本研究では、笑いのポジティブな側面に着目したが、笑いにネガティブな側面がないわけではない。伊藤（2012）は、保育所の幼児の笑いが攻撃性を帯びる例は少ないと報告しているが、友定（1993）によると、からかいのような攻撃性を持った笑いは3歳頃から見られるという。年齢が上がるにつれていじめにつながるといったように、時に笑いには強い攻撃性が潜んでいることにも注意が必要であろう。友定（1993）が指摘しているように、「○○したら笑われるよ」といった、しつこくを名目にした保育者の関わりも時に子どもを傷つける場合があることも見過ごしてはならないだろう。

加用（2008）は、よく笑う人とあまり笑わない人、笑い慣れている集団となかなか笑わせにくい集団があるように、笑いの経験が人によって違い、こういうことは幼児にも当てはまると述べている。感情表現の乏しい子どもは、しばしば気になる子として保育者の間でも話題に上がることが多い。今井（2003）は、「あまり笑わない子」と心配される乳幼児について保育士へのアンケート調査を行い、5.5%の子どもが「あまり笑わない」と評価されたと報告した。恩田・松澤（2007）は、笑いの多い子と少ない子で笑いの頻度に大きな違いがあることを報告している。一方、伊藤ら（2007）は、保育所において笑いが見られた状況を笑いの多い子と少ない子で比較した結果、あまり違いがないことを報告している。このような笑うことが少ない子どもについての実証的研究は少ないのが現状である。今後、保育者の笑わせようとする働きかけも含めた保育における笑いに関する研究を蓄積することは、気になる子として話題に上がる感情表現の乏しい子どもへの保育者の関わりを考える上でも意義のあることではないかと思われる。

2019年に施行された保育所保育指針や幼稚園教育要領では、改定前のものと同様、領域「人間関係」において、園生活を楽しむことや、身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感をもつことが挙げられている。また、保育所保育指針においては、乳児保育に関わるねらい及び内容が追加され、乳児保育が愛情豊かに、応答的に行われることの必要性が述べられている。本研

究は保育者の用いた笑いに対する幼児の反応のみを対象としたが、乳児期における保育者との安定した愛着関係のもとで見られる笑いや、そこで保育者によって用いられる笑いに着目した研究を行うことも今後の課題としてあげられるだろう。加用（2008）は、感情を畑に例えて、笑いの耕され方の違いについて言及している。乳幼児期からの様々な応答的な関わりによって子どもたちの感情が耕されていくと考えると、心地よい感情を培っていく上で笑いは重要な要素といえるだろう。

## 文献

- 原坂一郎. (1997). 幼児と笑い. 笑い学研究, 4, 4-10.
- 今井和子. (2003). 子どもと笑い (2). 幼児の教育, 102 (6), 23-31.
- 伊藤理絵. (2012). 幼児の笑いを考える: 笑いの攻撃性の観点から. チャイルドサイエンス, 8, 62-65.
- 伊藤理絵・本多薫・佐竹真次. (2007). 幼児に見られる笑いの分類学的研究. 笑い学研究, 14, 40-50.
- 加用文男. (2008). 保育における笑い論. 季刊保育問題研究, 234, 28-38. 新読書社.
- 厚生労働省. (2018). 保育所保育指針.
- 松阪崇久. (2016). 保育における子どもの笑いと人間関係. 笑い学研究, 23, 18-32.
- 文部科学省. (2018). 幼稚園教育要領.
- 中島英雄. (2008). 笑いの医学的効果. 季刊保育問題研究, 234, 8-18. 新読書社.
- 恩田真弓・松澤正子. (2007). 幼児期における人に向けた笑いの発達. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 10, 131-136.
- 大田紀子・牧亮太・山崎茜. (2010). 笑いをを用いた保育に関する研究: 手段として用いる笑いの有用性の検討. 幼年教育研究年報, 32, 133-139.
- 橘重男. (2010). 保育者の「ユーモアの感覚」(1). 信州豊南短期大学紀要, 27, 27-40.
- 友定啓子. (1989). 三才児の笑いと保育. 日本保育学会大会研究論文集, 42, 60-61.
- 友定啓子. (1990). 四才児の笑いと保育. 日本保育学会大会研究論文集, 43, 440-441.
- 友定啓子. (1989). 五才児の笑いと保育. 日本保育学会大会研究論文集, 44, 50-51.
- 友定啓子. (1993). 幼児の笑いと発達. 勁草書房.

## 謝辞

本研究にご協力くださった保育園の先生方および園児の皆様、観察を行うことにご快諾いただいたスポーツクラブ・キャプテン衣川信直先生に心よりお礼申し上げます。

## 付記

本研究の一部について、日本保育学会第69回大会で発表した。